2020年9月6日　　大井バプテスト教会　礼拝説教
説教題「主が招かれる食卓」マタイ福音書1章1～13節

主任牧師　加藤　誠

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」
（マタイによる福音書9章13節）

主イエスの伝道方針は非常にユニークなものでした。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」（13 節）。これは、当時のユダヤ教の「真逆」を行く挑戦的な教えでした。ユダヤ教では、聖書の教えをすべて守っている人が「正しい人」で、聖書の教えを守れない人が「罪人」。そして「神の国には、正しい人のみが招待を受ける」と教えていたのですから。

例えばユダヤ教では「神の国の招待を受ける、正しい人」とは次のような人たちでした。「ユダヤ人であり、聖書の教え（祈り、施し、ささげもの）を守り、病気や障がいのない健康な人で、財産があり、宗教的ケガレに触れる仕事をしていない人」。その逆に「外国人で、聖書の教えに疎く、病気や障がいをもっていて、貧しく、宗教的ケガレに触れる仕事をしている人」は「神の国の招待状を受けられない罪人」と分類されたのです。

今の私たちにはピンときませんが、当時のユダヤ人たちには、神の国の招待状を持つ人と持たない人の「境界線」がはっきり見えていました。「あぁ、あの人は神さまの招待を受けているけれど、この人は招待を受けていないな」というように。ごく一握りの宗教エリートだけが「招待状を持つ優越感」を味わい、「招待状を持たない人たち」と見下し、食卓を共にして付き合うようなことは決してしない。そのように「境界線」を意識することが神の国の招待を大切にすることだったのです。

しかし、その「神の国の招待状の境界線」を根底からひっくり返されたのが主イエスでした。今朝、ご一緒に読んだ場面もその主イエスのユニークで挑戦的な伝道方針を明確に示している場面の一つです。２節で「中風の人」が連れて来られています。中風とは身体的麻痺の状態を言い、それは神の災い、呪いを意味しました。明らかに招待状を持たない人（罪人）に分類される人です。何とか中風を癒してさえもらえたら、神の国に入る招待状を手に入れることができるかもしれないけれど、中風である限りは決して招待状を手にできない。何とか癒してほしいというわけです。ところが、主イエスはその人に「あなたの罪は赦される！」と言われました。これは「中風のままでは決して神の国には入れない」というユダヤ教の教えをひっくり返して、「あなたはそのまま（中風のまま）で、神の国に招待されている！」と宣言されたのです。ユダヤ教の律法学者たちからするととんでもない異端的な教えでした。「何を言う。中風のままで神の国に入れるわけがないだろう！神だけが

もっておられる招待状の権限を、どうしてお前ごときが変更できるのだ？！お前は神を冒涜している！」と非難したのです。

また、主イエスが「わたしに従いなさい」と声をかけた徴税人のマタイ。当時のユダヤ教の分類では徴税人という職業は、ローマ帝国の片棒をかつぐ卑劣な仕事であり、「招待状を決して受け取れない、ケガレた職業の筆頭」でした。ところが主イエスは、そのマタイを弟子にしたばかりか、彼の家で他の徴税人や罪人たちと、まるでそこが神の国の宴会でもあるかのように、喜びあふれた食卓を囲んだのです。「こいつは、メシア（救い主）気取りで自分勝手な神の国を語り、神を冒涜している！」と、ユダヤ教の指導者たちは憤りをあらわにしたのでした。

13 節「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい」。

主イエスは、神の国の食卓は「神の憐れみを、行って学ぶ場所」だと言われます。「行って」とは、自分の立場から相手の立場に「身を移して」ということではないでしょうか。例えば、中風という身体麻痺の状態には誰もがいつなるかわからない。「中風の人は、わたし自身でもあるのだ」と命のつながりを感じ、中風の人に自分の身を移して、一緒に食卓を囲んでいくのか。それとも、中風になったのはその人の自己責任とでも言わんばかりに、健康な自分の状態から一歩も身を移そうとせず、中風になった人を迷惑扱いしていくのか。

主イエスは、神の国の食卓は、いまどんな病気であるか、どんな職業で、どんな肌の色かに関係なく、一人ひとりに注がれている神さまの憐れみと慈しみのまなざしを大切に受け取っていく食卓だと教えてくださいました。その神さまの憐れみと慈しみを「行って、学んでいく」。そこに神さまに従う道があると。

先日のプロテニスの大坂なおみ選手の言動に、衝撃と鋭い問いを受ける思いがしました（巻頭言参照）。彼女の言動の中心には、「あの銃撃を受けた男性とわたしの命はつながっている。これを素通りしてしまったら、わたしはわたしではなくなってしまう」という鋭い感性があると感じます。

主イエスも、中風の人や徴税人マタイを「可哀そうな、助けてあげなければならない人」と上から憐れんだではなく、中風の人の中に自分を見、徴税人マタイの中に自分を見て、そこに命のつながりを感じて、一緒に神の憐れみと慈しみにあずかっていきたいと行動されたのではないでしょうか。ですから、マタイの家で他の徴税人や罪人たちとも楽しそうに食卓を囲まれたのです。さて、この主イエスの「光」に照らされて、わたしはどのような生き方を選んでいくのでしょうか。聖書の真ん中に神さまの慈しみを受け取りながら、私たち人間がつくりだしている境界線を越えていくような歩みに導かれたいと思うのです。